

邪悪な魔王が 伝説の女勇者に転生したようです

酒井仁
挿絵／笹弘



立ち読み版

レスティーナ・リグボルト↓

魔王ブロウ・ブロウが人間の美少女に転生した姿。
再び魔王として世界に君臨するため立ち上がる。

登

場

人

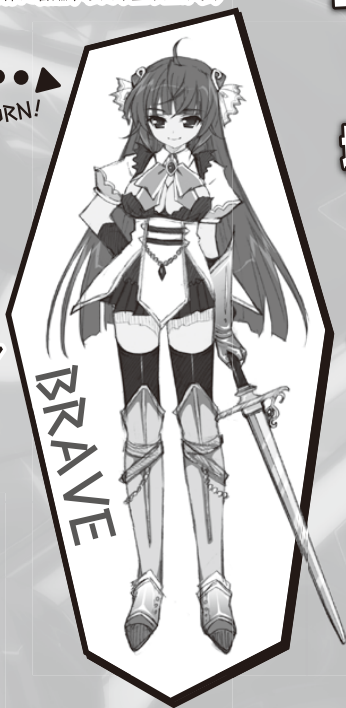
物

紹

介

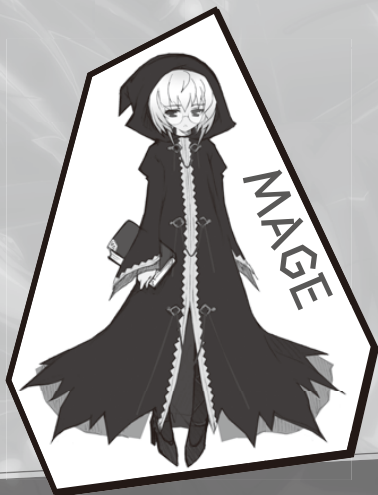


●●●●●▶
REBORN!



↑ 魔王ブロウ・ブロウ

かつて世界を恐怖に陥れる存在だったが、
突然現れた謎の破壊神によって滅ぼされた。



← シュシュ・トーリ

レスティーナとは幼なじみの魔法使い。
無表情で何を考えているのかよくわからない。

ウィリアム・フェルディナンド→

レスティーナの剣術の兄弟子。
正義感は旺盛だが、かなり間の抜けた性格をしている。



↓ケイレン・リグボルト

回復魔法を使いこなす、レスティーナの祖父。
ヨボヨボだがスケベ心が旺盛ないじさん。



ギザラー→

自称・魔王プロウ・プロウの腹心。
魔王亡き後、その跡を継ぐべく頑張っている。

BRAVE GIRL &
THE LIGHT STAFF

そう考えるレスティーナは、二重の意味で間違っている。

人の娘として生まれ変わったレスティーナは、男勝りで剣の才能があつたがために、「少女」として見られることがほとんどなかった。

それもあつて、魔王の記憶が鮮明なものになると、ますますレスティーナは自分を女だと意識しなくなっていたのだ。

（私はッ、誇り高く、邪悪で強大な魔王！ たかが乳首や股間を弄り回されただけで、こんな醜態を晒すなど……）

だが、本人が意識していなくても、その肉体は乙女として順調に成長してきた。

女として愛撫を受け入れれば乳首は充血し、股間からは甘い蜜が分泌される。そのようにできているのだ。

なまじ「魔王」の記憶を持っているティーナは、初めて感じる女の悦楽に戸惑い、為す術もなく喘ぎ悶えることしかできないでいた。

「はあっ、はっ、あううううッッ。んぷっ、んちゅ……げほ、けほっ！」
ぬちゅ、くちゅ、にゆるるるるっ。

幾本もの肉触手がティーナの目の前で束になって、男根ほどの太さになる。

魔物はそれをあたかもペニスのように乙女の唇に擦りつけ、口腔を陵辱にかかる。

「うえ、げふっ、ん、んむうううっつっ？」

ずぶずぶ……体液のぬめりを潤滑油にして押し込まれる触手によって、ティナの喉がボ
ゴリと膨れ上がる。

だが魔物の体液の麻痺作用か、不思議と息苦しきは少ない。

むしろ適度に麻痺した喉粘膜を触手が擦り立てるたびに、嘔吐感と解放感の入り混じつ
た快感で頭の芯が痺れそうになる。

(ううう……こいつら調子に乗って、口の中で暴れまくりやがって〜っ。乳首とか足のつ
け根とか、そ、そんなに刺激するな……ッッ)

最初は不気味で不快にしか思えなかったそれが、今や倒錯的な快楽を生んでいることを、
少女勇者は認めざるを得ない。

(これが——人間。人間の、女はこんなふうにおっぱいやお股を刺激されたら、気持ち
よくなってしまうものなのか)

自分が魔物ではなく人間に、それも男ではなく女に転生したことの本当の意味に、ティ
ナは初めて気づき始めている。

(女はこんなふう気持ちよくなって、お、男に求められて繁殖するんだ……こんな
触手なんかじゃなく、に、人間同士で欲情しあって、それで、それで、わ、私の身体を……
ッッ)

かああああっっ。

下等な触手蟲に嬲られているという羞恥を遥かに超える恥ずかしさに、少女の全身が火が点いたように火照ってくる。

(たっ、たとえばウィルも!? わ、私を見てそんな気分になつたりするのか?)

人間の、年頃の男女であれば異性をそんな目で見てもなんらおかしくはない。

頭では理解できていても、たつた今自分がお年頃の乙女であることに気づいた元魔王は、触手に嬲られながら混乱する。

(い、いやいやいやっ! あのぬぼ〜つとした、糸目の、呑気でお人好しのウィリアムに限って、そんな、女に欲情するなんて、あああり得ない、考えられないい〜い〜ッ)

一度意識してしまふと、乳房や股間を巧みにまさぐる触手がウィルの指や舌だつたら…と妄想を巡らせてしまふ。

(ひいいいっ! い、いくら相手がウィルでもそれは…お、男の無骨な手で全身を撫で回されたり、こ、こ、股間を弄られたり、あまつさえ、う、ウィルの男の、あ、アレを私のここに入れられたりしてしまつたり!! うええええ、そ、それはさすがにおぞましすぎる…ッ)

真つ赤になつたり青ざめたり、目をグルグルさせて困惑する少女の無垢な身体を、触手は飽きることなく弄び続ける。

ティナの精神が乱れば乱れるほど、それは彼らの糧となるのだ。

「ん、ぐ、ぷはあつっ！ もおっ、お前らしい加減にしろっ、まともに考えが巡らせられないだろうがあつっ」

喉奥深くまで抉っていた触手を勢いよく吐き出すと、乙女は茹で蛸だこのような顔で叫ぶ。

「わっ！ 私とウィルは、そう、兄妹！ 兄妹みたいなものだ！ あの、男女の機微もわからぬ唐変木が、妹のような存在にそんな欲情を抱くわけがない……はず……」
と、自分のことは棚に上げてそこまで言っつて、ハッと何かに気づく。

そういえばウィルを遠方に追い払おうと思っつて渡した手紙にはなんと書いた？

「そ、そういえば……二人つきりで話したいとか適当なことを書いたような……ふ、二人きり、年頃の女が男を呼び出して、二人きりで秘密の相談とか、あああああああ
これはまずい。

何かよくわからないが、とてつもない悪手を打ってしまったような気がする。

反射的に両手で頭を抱えようとしたが、ぐいと触手に引き戻され、バランスを崩す。

その場にへたり込んだ少女の肉体を、無粋な触手どもが再び刺激し始めるが、ティナはそれどころではない。

「うわああああ、今になって沸々とこっ恥ずかしさが込み上げてくるううう……ッ、いい、いや待て、落ちて着けレスティーナ。私はいずれ魔王としてこの世に君臨する身、プロウ・プロウだった頃など、もっと酷い悪徳に手を染めたことだってあったはず」

死と破壊を振りまき、人々に絶望を植えつける魔王たるもの、悪行非道の限りなら、一通りはこなししてきたし、その記憶だつてある。

「そうっ、我こそは偉大にして邪悪なる魔王ブロウ・ブロウ!! 無垢な姫君を拐かして魔王自らその純潔を散らしてやったことだつて………うひひひひひひひひひひ、私つたら私つたら、な、なんていやらしいことをおお〜〜」

転生の記憶が鮮明に甦り、ティナは触手を引きちぎらんばかりの勢いでのたうち回る。

ティナの羞恥に触手はますます激しく感応し、ぐちゅぐちゅぬるぬると弄くり回すが、もはやそれに抵抗する気力すら起こらない。

「わたし……私、さ、攫つてきたお姫さまの股を開かせて、ドレスを引き裂いて、お、思いつきり股を広げさせて、そ、そこに……ッ」

実際にどこかの姫君を攫つて陵辱したのは、百年以上過去に生きた魔王。

だがティナにはその生々しい記憶の一部始終が残っている。

言ってみれば「若い頃にやらかしたやんちゃ」の記憶が、頼みもしないのに脳内で鮮やかに再生されてしまうのだ。

「ここ……ここに生えてた、巨大で血管の浮いた、いきり立つ暴れん棒で、お姫さまの処女を……あああつ」

自らの過去世の黒歴史に身悶えする少女の羞恥を嘲笑うかのように、数本の触手が男根

のように寄りあわさって、下着の上からぐいぐいと乙女の純潔に押しつけられる。
ごりりっ。ごり、ぐりぐりっ。

「うくうっ！　そ、そうだ、こんなふうに嫌がるお姫さまをイチモツで散々脅かして、自分の無力さに涙する乙女の初物を奪った挙げ句、魔王の子を宿すがよいわ」とか言いながら何度も中出しして……」

敏感な肉芽が擦り上げられ長時間愛撫され続けた突起物に差し込むような快楽が走る。
思わず身体がのけぞり、長髪が揺れる。

「んあああああっ！　き、気持ちいいけどおぞましいっ。私は、こんな恐ろしいことを無垢な乙女にしていたのか……そして、私がかつて行^{おこ}つてきた悪行とまったく同じことを今されているというのか……」

下着の上からなので、処女膜を引き裂かれる恐れこそないが、興奮した触手の先端からは、まるで射精のように体液がどびゅどびゅ進む。

巨乳が房ごと揉みしだかれると同時に乳首をつねり上げられ、胸の谷間を太い触手がゴリゴリ何度も往復する。

（恥ずかしい……昔私がかつたことも、今こんなことされてるのも。なのに、身体のあちこちが信じられないほど気持ちいい……）

びゅるっ、びちゃっ。どぶぶっ。

顔面に撒き散らされる粘液で視界が曇り、意識が遠のいていく。

「んひい……うぐううッ。こんな、こんなことで感じるなんて、いやだ……気持ちよくなんか、なりたくない、い………」

それなのに全身の皮膚が異常に鋭敏になり、快感を訴えてくる。

これまでとは比べものにならない巨大な感覚のうねりがじわじわと押し寄せてくる。

（もう……何がなんだかわからない……自分がどこにいるのか、自分が何者なのか……）

身体の奥の奥、特に燃えさかるように火照っている下肢のつけ根の中心。

そこで、快感の小爆発が立て続けに起こり、乙女の快楽神経をちりちりと焼き焦がしていく。

「んあああつつ！ わたし……私はッ、あああああッ、灼けるッ、お、お股……おま○

この奥から、込み上げてくるううッ」

びくんっ、びくびくっ。

魔王だった頃、自分が男性だった頃の射精の快楽とはまるで違う。

男のそれが女を刺し貫く槍のような快感なら、女のそれは全神経を搦め捕り、脳髓が快楽の汁で満たされていく、逃げ場のない快感。

細胞の一つ一つが女として、雌として覚醒し、レスティーナはよがり悶えている自分を受け入れていく。



森に迷い込んできた可憐な少女剣士を、敵か餌か判別しかねていた二匹の魔獣は、ただの一瞬で相手の正体を知り、そして戦慄した。

「グルウウ……マオウ、ダト？」

「ダガ、マチガイナイ……」

「我が名はレスティーナ・リグボルト。人の身に転生しながら、魔王ブロウ・ブロウの力を受け継ぎし新たな魔王ぞ！ 汝ら、我に忠誠を誓い、我が軍勢のもとに集うことを望むか」

華奢で可憐な美少女の口から発せられたとは思えぬ、威厳に満ちた重々しい声に、狂暴な人狼が気圧されている。

魔王とは、単に最強の魔族を意味するだけではない。

魔族、魔物の頂点に立つと同時に、そのすべてを統べる魔の長たる風格と器を兼ね備えてこそその存在なのだ。

（くっくく、我が仇、破壊神を討ち滅ぼした後のことまで、私はちゃんと考えているんだ。今のうちに各地に魔王軍の拠点を築き、世界征服の下準備を進めておくのだ）

そのためには、その土地土地を支配する強力な魔族に忠誠を誓わせ、手駒を揃えておくに越したことはない。

「どうだ、我に忠誠を誓うか、人狼族」

「グルウウ……………」

レスティーナの魔王の力は十分感じているようだが、魔獣たちはまだためらっている。

それは彼らがティナの前世、つまりブロウ・ブロウを直接知らないからだろう。前魔王が滅ぼされてから既に百有余年が経過している。

「ここは、いい森だな——人狼族の勇猛なる戦士、ノイックのいた頃も、このような豊かな森がそこかしこにあったものよ」

少女の言葉に、人狼たちは一斉に唸りを上げる。

「グオオオオ…………ツ。ワレラノ偉大ナル父祖・ノイック！ ソノ名ヲ知ルオマエハ、マサシク魔王ノ遺志ヲ継グモノ！」

ティナが口にしたのは、ブロウ・ブロウに仕えた人狼族の勇猛な戦士の名。

あれほどの魔族ならば必ず一族の記憶に残っているだろうとかまをかけてみたのだが、少女の目論見は見事に当たったようだ。

だが、二体の魔獣の黄色い眼からは、恐れとも警戒ともつかぬ剣呑な光が消えないままだ。しきりに喉を鳴らし、耳まで裂けた口の端から唾液を垂らし、舌なめずりをしている。

（ちっ……私が魔王だということは頭で認めているが、ケダモノの本能の方はままならぬらしいな。こいつら、私に欲情している）

なまじっか美少女であるのも困りものだな、とレスティーナは肩をすくめる。

そう、彼らは若く美しい人間の美少女であるレスティーナに対し、牡として発情していたのだ。よくよく見ると下肢のつけ根の毛を押しつけるように、赤黒い肉棒が膨張し始めている。

「まあそれもしようがないか！ 私は強大なる魔力と美貌を兼ね備えた美少女魔王なのだからな！」

すう……と目を細め片手をかざすと、「バシユン、バシユン！」と魔力弾が打ち出される。「グォ！」「グァッ」

神速を誇る人狼が、避ける間もなく打ち倒される。ティナの見た目からは想像もできない電光石火の早業に、人狼たちは言葉を失う他ない。

「グウ……コ、コレガ魔王ノチカラ……ムッ？」

「クツクツクツ……」

しゅるり、とりポンをほどくと、ティナは胸元を大きく広げ、巨乳をまろび出させる。

さらに脚絆を片足ずつ脱いで、さっさと下着を取り去ってしまうと、獣たちの目はミニスカから見え隠れする乙女の花園に集中する。

「おっと、そのまま寝ころんでいろよ、犬っころ」

手をかざしただけで、不可視の魔力が人狼の巨体を地面に押さえつける。自分から手を出せないという状況は獣をいっそう興奮させ、巨大な肉の柱が隆々と天を仰いで勃起する。

「絶世の美少女に転生したとはいえ、たかが野犬に魔王の肉体を下賜するわけにはいかぬ。だが……我に忠誠を誓うならば、その浅ましく屹立したイチモツをかわいがってやらなくもない」

ティナはそつと小岩に腰を下ろすと、ぱっくりと股を開いた。目立たないアンダーヘアはほぼないも同然、ぷっくりと肉厚の乙女の美貝が丸見えになってしまふ。

「グウオオオオオ……ッッ」

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ……」

見せつけるように腰を浮かせると、獣のペニスに花びらが近づき、人狼たちの興奮を煽り立てる。

口の端にあぶくを溜めてぎりぎりと言を鳴らしつつ、身体はティナの力によって起こすこともできないでいるのだ。

「さて、ではこういうことをしたらどうなるかな」

す……と脚が伸びて、タイツに包まれた少女の爪先が、ひたりと肉茎の裏側に当てられる。

（す、すごい……こんなに醜く膨張して、魚人の卵管の比ではないな）

人狼の体臭はいっそうきつく、フェロモンが鼻孔に突き刺さってくるよう。つんと尖った亀頭は、いかにも女の肉を切り裂き貫くのに適しているようだった。

「グルル……グルルウ……」

(ああ、見られてる、あんなぎらぎらした目で私のお股を見つめて、このぶつといもので私を犯したがっているのだな)

ぞわわっ。未だ汚れを知らぬはずのティナの背筋に快感が走る。

触手魔物や魚人の卵管などとは違う、勃起ペニスとは牡の明確な獣欲そのものだ。女陰をかき分け、子宮に子種を注ぎ込んで孕ませようという男の本能なのだ。

(いや、いや、私までこやつらの欲望に振り回されてどうする。魔王としてこやつらを従え、支配下に置いてこそその魔王だぞ。くくく、見ておれ)

「ワフオウウツ!!」

ティナはもう片方の足も伸ばすと、両脚で茎を挟み込むようにした。

ひつきよう股が開く体勢になってしまい、股間はずっと人狼の視線に晒され続けることになる。

じゅわっ……触れてもいない肉唇の奥が火照り、熱いものが奥から滲んでくるのがわかった。

(いや、今すべきことはこやつらを屈服させ、忠誠を誓わせることだ。集中しろレスティナ)

ブロウ・ブロウだった頃は自分のペニスが合ったものの、他人のそれを弄るのは初めて

だ。

だが人狼の興奮の唸り、生命エナジーの動きなどを観察すると、どこをどうすれば肉棒が快感を感じるかというのが自然とわかってしまうのだ。

（あ、ああ、私いま、魔物のおちんちんを踏みにじって、悦ばせてる……）

自然とティナの息も荒くなり、顔が火照ってくる。ぎゅっ、ぎゅむっと踏みつけるように。あるいは土踏まずの部分で挟み込んで上下にしごく、粘っこい透明な汁が滲んでくる。

「ど、どうだ人狼族？ 魔王の足にイチモツを踏みつけにされて、よがる気分は」

「ワオッ、グオオオオンッ！」

亀頭を握るように足指を曲げ、片足の踵かかとを睾丸の辺りに沈み込ませると、「びく、びくんっ」と大きく肉棒が跳ね上がる。

「むっ、もうそろそろか……うひゃっ？」

「ウオオオオ……ンンッ！」

びゅるるっ。どびゅっ、びゅばあああつ。

まるで白濁の噴水のように、獣の子種汁が噴き上がった。元々強い獣の体臭に、精液独特の臭気が混じり、少女魔王の鼻孔に突き刺さる。

（ああ……ちんぼ汁の匂いも久しぶりだ。昔はこれを幾多の女に注ぎ込んでやったものだ

が、今は注がれる立場になつただな（なんてな）
人狼たちに自分を犯させるつもりはない。

だが足コキで精を搾り取つてやつたという満足感に、首の後ろがぞわぞわと興奮に痺れる。

「グルウオオオツツ、オ、オレモツ！ オレモ魔王サマニチンポラシゴカレタイゾオオツツ」

揃つて打ち倒されたはいいが、放置されていたもう一頭の人狼が血の涙を流さんばかりに慟哭する。

パンパンに張りきつた獣ペニスに爆発しそうなほど充血している。

「くつくく、よかろうよかろう。貴様ら同時に、この恐るべき魔王の実力を味わわせてくれよう。貴様らの精力、どこまで持つかな……とうつ」

なんの予備動作もなく身を起こし跳躍した少女は、ただの一瞬で人狼のそれぞれの股間に足を乗せ、優雅に佇んでいた。

「グムウウツツ、ア、足ノ裏ノ感触ガツツ」

「ウオオツツ、マタ漲ツテクルウウツツ」

人間の男であれば急所を踏みつけにされて悶絶しているところだが、さすがは魔物。

ティナほどの体重はむしろ心地いい刺激とばかりに、海綿体がみりみりと充血していく。



「ふぎつ……う、くふうう……ッッ」

「まだ頑張る？ でもそれじゃ続きを読むどころじゃないでしょう」

キャサリンの唇は、ティナの耳にキスしそうなほど近づき、囁くたびに舌先が耳たぶをくすぐり、さらに少女を追いつめる。

（も、もうちよつとで、読み終わるんだ、も、もう、少し……ッッ）

くちゅつ、くちゅつ、ぐり、ぐりりんっ。

敢えて膣穴を激しくかき回すことはせず、むしろ直腸側からヴァギナを圧迫するその手並みは、数えきれない女たちを籠絡してきたプロフェッショナルのもの。

「はあ、はう、うくつ……！ ニヤ、ニヤンニヤン、おま○こ、を……ぐ、ちゃぐちゃ、に、かわ……かわいがって、くらっ……！」

押し寄せる快楽に朦朧となったティナは、自分が読まされているカンペの内容もまるで頭に入っていない。

それが、客からの陵辱をねだる文言であることにも気づかず、あと少し、もう少しという一念で文字を追っていく。

「かわいがって、くらひゃ……い……お、おねっ、おねがい、ひ、ま……」

「ざーんねん、時間切れよん」
アヌスを熱く灼く回転、膣粘膜への刺激。

最後のとどめは——念入りに研ぎ澄まされた爪先の、クリトリスへの鋭い一撃。

「んい いい ぅ ぅ ぅ ぅ ぅ ぅ ツツツツツッ!」

ぷしつ、ぷしやああああっ。

透明な液体が、断続的に乙女の花びらから噴き上がる。衆人環視の中での潮吹きなどと頭で思っても肉体の反応は抑えられず、両下肢がびく、びくつと何度も跳ね上がる。

誰がどう見ても、少女がエクスタシーに達しているのは明白だった。

キャサリンがゆつくりと指を抜き身体を離しても、自分で自分を支えることすらできず、ステージ上にぐったりと横たわってしまう。

(イッちゃった……あんな大勢の男たちに見られながら、お漏らししながらイッてしまつた……魔王の転生たる、この私が………)

だがこれがピンチの序章に過ぎないということ、レスティーナは理解していない。

ぱち、ぱち、ぱちと手を打ち鳴らすオーナーが合図すると、金髪美女にスポットが当てられ、大きな拍手が湧き起こる。

「ん ぅ ぅ ぅ ツッ! レスティーナ嬢、あと一步でした、実に惜しい。ですが勝負は勝負、キャサリン嬢の勝利のようです。皆様、勝者に盛大な拍手を!そして、敗者には当店恒例の、まな板ショーでお客様にサービスしていただきましょう!!」

まな板ショーという聞き慣れぬ言葉にぼんやりしていると、客の男たちが次々とステー

ジに上がり込んでくる。

「え……な、なに……きやあつ?!」

ただステージに上がり込んできただけではない。皆先を争うようにズボンを脱ぎ、下着を下ろし、ギンギンに勃起したイチモツをまろび出していく。人狼の獣ペニスに比べると若干サイズダウンするとはいえ、露出した亀頭はてらてらと先走り汁で輝き、彼らがテナの絶頂を見ていかに興奮していたかがわかる。

(あ、あれは皆、私の……を見て? それにこの牡の匂い)

「ふふっ、わかる? みいんなあなたのおま〇こにおちんちんをぶち込みたくてウズウズしてたのよ」

「なっ?! ちよ、ここは踊りを見せるところじゃなかったのかッッ」

そのときになって、ようやくティナは自分の置かれている窮地に気づく。

「まな板ショー」とは踊り子が淫らなダンスを披露した後、ステージ上で客と実際にまぐわうサービスののだ。

「じよっ、冗談じゃないッッ。いくら無銭飲食したからって、そこまでしてやる義理は……」

「ああら、もしかしておぼこだったの、お嬢ちゃん。くすっ、剣なんか振り回してるクセに、お子様だったのねえっ」

からかうような金髪美女の口調にカチンと来て、ティナは反射的に言い返す。

「そ、そんなわけあるか！ このレスティーナ様を誰だと思っている!!」

人間などに舐められてたまるか、と魔王としての矜持がむくむくと頭をもたげる。

「聞いて驚け、我こそは最凶魔王ブロウ・ブロウの転生！ 魔王の生まれ変わりなるぞ、下郎めが！」

快楽の余韻でまだ足が痺れているが、魔王の意地が思わず正体を口走らせてしまう。
しかし。

「うひゃひゃ、あんないやらしい声で悶えてた娘が魔王なら、俺は銀河大帝王だったの！」
「なら俺は勇者様だ。股間の性剣で魔王を退治してやるぜ」

「なっ、貴様ら、私は本当に」

しかし、猫耳にやんにやん姿でそれを言っても、説得力の欠片もない。

「大体魔王つてのは男だったはずだろ。す、すると今巷で流行りの男の娘……」

「ええい、わけのわからんことをくっツツ」

はだけられた乳房を隠すこともなく、はったと勃起ペニス軍団を睨み据えるや、近くにいた男の肩をドンと突いて仰向けに倒す。

「う、うわっ！ お、おいちよつと」

「うるさい！ 舐めるなよ、下賤な人間ども！ その貧相なブツで私を屈服させられると

思っているのか。こんな……うわ、熱ッ？」

押し倒した男に跨またがり、天を仰ぐ陰茎を握った手を思わず引つ込めそうになった。

だが、組み敷いた男からの、そして周囲の興味津々の視線に気づくと、あらためて握り直す。

「こんな……ちよつと熱くて、硬さもそこそこで、い、いや、短小ちんぼなど、ここ怖くもなんともないんだからなッ。やってやるッ」

あくまで虚勢を張ったまま、ぎこちなく腰を下ろしていく。だが、入れるべき穴に龟头をあてがおうとするが、なかなかうまくいかない。

（あ、あれっ？　こちらへんで合ってるんだよな。んんっ、さつきまで散々弄られてたから敏感になってる……）

客もキャサリンもにまにまといやらしい笑みを浮かべ、どう見ても生娘の悪戦苦闘を固唾を飲んで見守っている。

（うっ、あのちつちやい突起にちんぼの先が当たって擦れて、なのに入らない……ほ、本当に入れちゃうのか私？　急に怖くなってきた……てかわたし初めてなのに、なんでこんなことに？）

だが、今さら引き返すことは場の雰囲気的にもはや不可能。女は、いや魔王は度胸と腹を決めると、股間の窪んだ部分めがけて、思いきって腰を落とし込んだ。

「いぎっ……？ つつう、あ、あつ、な、なにこれ……やだ、どんどん奥まで入って、いたい、痛、イタッ？」

処女膜がぷちぷちと破れていく痛みにも、膝がガクガク震える。その拍子にずずつと一気に身体が男の腰に尻餅をつく格好で、いきなり挿入が深まる。

（くうっ、こんな……魔王だった頃は、攫ってきた娘に突っ込む方だったのに！ つ、突っ込まれるのがこんなにつらかったなんて……ッ）

「おおうつ？ こりやなんて具合のいいおま○こだ。もしかして初物か？」

「う、ぎい……ッ、ちよ、う、動くなあ……」

息も絶え絶えの少女の言葉など、男の耳には入っていない。処女穴の締まりのよさにだらしなくやに下がり、ぐつと両手で骨盤を掴むと、真上に腰を突き上げてきた。

「ふぎいんっ!!」

処女穴は狭くて堅い。だが、キャサリンの卓越したテクニクに弄ばれた秘穴は適度にほぐれ、たっぷりの蜜液に溢れている。

男の茎はまっすぐに乙女の聖地を突き進み、力強く子宮を突き上げた。内臓がかき回される感覚に、ティナの肢体は大きく反り返る。

「ぬおおつ、なんて締まりだ。魔王様のま○こは初物ま○こだぜ！」

「いぎっ、ひ、ひいんっ。やめっ、下から、つつ、突き上げる、な………あああああ

ツツツ

名前も知らぬ男に処女を奪われたレスティーナの背筋に、冷たいものが走る。

純潔を失ったこと、破瓜の激痛、そんなことではない。激痛はとうに引いていて、疼痛が残っているだけだ。それよりも何よりも、自分の肉体が、予想以上に快楽に傾いていることに、少女魔王は怖気を感じた。

(屈さぬ……人間風情に犯されて、魔王がよがるなど、気持ちよくなってしまうなどというところが、あ、あつてはならぬ……のだッ)

快感を感じまいと必死に意識を逸らそうとしたティナの顔の真正面に、別の肉棒がぬつと出現する。

「ひいつ？」

「へへ、お、俺はこつちでいいや。さ、さあしゃぶつてくれよ」

ねじ込まれた茎は、人狼に勝るとも劣らぬ強烈な匂いとポリウムで、ティナの口中を犯す。

男は少女の頭を掴んで固定し、がしがしと激しく腰を揺らし、喉の奥を突いてくる。さつきは人狼を手玉に取っていたというのに、今は人間風情にいいようにされ放題とは、なんとという屈辱。

(なのに、なんで……なんでこんな気持ちいいんだ……ああ、このくっさい牡の匂いで頭

が痺れてきそうだ)

「うっ、こいつ舌を使い出したぜ。生娘とは思えねえ……存外素質があるようだぞ」

「それじゃ、遠慮することはねえな」

背後で聞こえたその言葉に、ぎくりと身をこわばらせたが、時既に遅し。

尻に刺さっていた猫しっぽが乱暴に引き抜かれると、菊門に熱いものがごりりと押しつけられる。

(そ、そこはまだ敏感で……あ、あつ、ああッッ！)

めりめりつ、ずぶずぶ……ッッ。

尻姦は、あつけないほど簡単に為された。

魚人の卵管、そしてテクニシヤンの指によって犯され続けてきた少女魔王のアヌスが、今さらペニスを拒絶できるはずもない。

「あ、ぐ、ふう………ッッ！ ら、めえ……おひりは、やめ……ッッ」

しゃぶらされていたペニスを吐き出し、震える声で訴えても、それは男たちの獣欲を煽る効果しか持つてはいない。

「きつ、生娘なのに尻でも感じるってか？ ひひ、こいつはとんだ淫乱娘だ。おう、け、ケツ穴の締まりも最高だが、奥の感触がたまんねえッ」

がすがすと背後から腰を突き出し、荒々しく少女のアヌスを犯す。

「ひい、ま、魔王の尻穴に、ぶ、無礼な……いぎいっ」

「おおつ、ケツ穴が吸いついてくるみたいだ！ おい、もつとま○この方も突きまくつてやれよ」

「おう、二穴を同時に抉られて、悶えよがりやがれ、えろえろ魔王様ッ」

四本の逞しい腕ががっちり少女の骨盤をpushさえつけ、リズムを合わせて前後の穴を陵辱する。

前の穴からは淫らな乙女の蜜が、後ろの穴からも腸粘膜液がじつとり滲んで、ティナの意志とは無関係に男の茎をくわえ込む。

(あああああつ、中で擦れてる、ごりごり擦られて、き、気持ちよくなつちやダメなのに、ダメ……だけど、気持ちいい……ッ)

「うおおおっ?」

男の声が、早くも快感に震え始める。下にいる男も顔を汗びっしょりにして、かろうじて射精を堪えている様子だ。

「くう、初物のクセに、なんて具合がいいんだッ」

「ち、ちんぽが千切られそうだ」

「んひい、やめ……や、め、ふひいんっ」

もつと少女の処女穴を堪能しようと、男たちの動きが乱れていく。

「後がつかえてんだぜ、さくさくこなせよ！」「お、俺もうぶっかけていいわ。出るッ」
処女でありながら感じまくるレスティーナの乱れっぷりに、客たちも限界。

次々にティナを取り囲んでは、髪や乳房めがけて白濁を浴びせ始める。

「んひゃあああ、らめっ、ちんぽ汁ぶっかけられええっ。お、おかひくな……んぶうっ」
「よっしや、パイズリいただきだッ」

真正面に立った男の手が衣装をむしり、巨乳をまろび出させる。

深い胸の谷間にイチモツを挟み込むと、少女の手を乳房にあてがわせ、荒々しく上下に揺する。

「そら、こうだ！ こうやっておっぱいで擦りながら、口にもねじ込んでやるぜッ」
後頭部を掴まれて唇にまでねじ込まれ、目を白黒させても、客の暴走は止まらない。

他の客の体液が降りかかるのも構わず、自称魔王少女の温かな喉の感触に喜悦の声を漏らす。

（こんな……おっぱいでちんぽを擦るなんて、人間風情にこんな奉仕をしてしまうなんて……）

魔王としての意識が屈辱を訴えるが、押し寄せる肉棒の匂いに頭がクラクラして、つい言われるままに乳房を揺らしてサービスしてしまう。

「おおお、こんなかわいい娘がおっぱいとお口でオレのちんぽにご奉仕にゃんにゃんして

くれてるなんて、た、たまんねえ〜っ！」

「んぶうツ。んぐ、ちゅぱ、れるる……ツツ！」

じゅぼっ、じゅぼ、じゅるるるっ。少女の唇に肉棒が激しく出入りする。衣装は男たちに引きむしられて、タイツはビリビリ、乳はむき出し。

三人の男が肉棒をねじ込み、周囲の男もティナの髪を掴み、手に握らせ、さながら蜜に群がる蟻のように乙女の肉体を貪り続ける。

「くっ、もうダメだま〇ここに出すぞおおツツ」

膣のペニスと尻穴を犯す棒が、同時に震える。

どびゅっ。びゆるびゆるっ、どく、どくんんっ。

じわりと熱い感触を、子宮と、尻穴にも感じ、少女は驚愕に目を見開いた。

(う、そ……おま〇こと、お尻にも出された……?)

「うおおお、お口にもぶち込んでやるう！」

驚く暇などない、今度は喉の奥にびしゃりと熱い塊が浴びせられ、粘液が胃の腑に滑り落ちる。

「おらおらっ、出したヤツアとつとと交代しろ！」

「ひっひひ、俺はパイズリさせてもらおうか」

「俺はケツだ」「俺のをしゃぶるんだよ！」

男たちの数は二十人はくだらない。

その全員がティナの全身に欲望を吐き出すべく、押し寄せてくる。一人が果てればすぐに次が、一人が抜けば代わりの者が。ティナにとっては、何発出しても決して萎なえない絶倫男を延々と相手にするにも等しい。

「や……まっ……これ以上、されたら、本当に、ほんとうに……んひいひいッッッ」
既に破瓜の痛みなど消え失せた。ヴァギナもアヌスも、ペニスを挟む乳房でさえも、今のティナにとっては快楽をもたらす部位でしかない。

「あつ、らめ、またいつひゃ、イク、いぐいくいうううッッッ！」

「イッチまえッッ！ 俺のザーメン子宮に注がれて、孕んじまえよおっ」

「ひひゃあああつ、孕んじやううう、知らない男のちんぽ汁で、孕んじやうううううッッッ」

全身ドロドロのザーメン漬けになってもなお、乳を揉まれ、尻を掴まれ、激しいピストンに晒される少女の顔は、確かに愉悅に染まっている。

一気に女として開花した少女の肉体は、その身に加えられる嵐のような陵辱さえも、とろけるように甘い悦楽として受け止めていた。

「はああんっ、こんな……ちんぽッ、人間のちんぽでイカされるうッッ。ま、魔王なのに……お口と、ケツ穴と、おま〇こと、全部の穴でイカされちゃうううううッッッ！」

男の上で身をくねらせ、自ら両手に茎を持ってしごきまくるレスティーナの顔は、剣士でも、ましてや魔王ですらない。

肉の快楽をどれほど貪っても足りることのない、貪欲なメスそのものだった……。

「た、確かここらの店だと聞いたんだが……」

まだ少しふらつく足でウィリアムがやってきたのは、ケイレンとシュシュが赴いたという歓楽街。

いったいなぜ大司教たるケイレンがこのようないかがわしい場所に、と訝^{いぶか}しむ青年の耳に聞こえてきたのは、聞き覚えのある少女の怒声。

「ジ〜〜〜ジ〜〜〜イ〜〜〜！ てつめえええ、自分の不始末を孫になすりつけておいて、てめえはその孫の恥ずかしい姿をかぶりつきで見物してるつてのは、どおゆう了見だあ〜〜〜ツツツ!!」

「ひっ、ひええええツツツ」

ばしゅっ、どつかあーんっつ。

黒い魔力弾が連続で発射され、「おピンクミュージックホール・ニャンニャン」の看板を木っ端微塵に吹き飛ばす。

「おら、おらおら！ どーせてめえは回復魔法があるんだろ、もう二、三十発くらい食ら



つとくか？」

「ひい、ひいひいっ」

「い、いったい何がどうなつて……というか、レストイナー！ キミは、人間に危害を加えないっていう約束を」

慌てて駆け寄るウィルに、少女はギイン！ と火の出そうな凄まじい視線を向ける。

「身内のことだ、すっこんでろウィリアム」

「で、でも」

うろたえる青年の肩を、男ががしりと掴む。怪我はなさそうだが、その顔は恐怖に引きつり、涙でぐしゃぐしゃだ。

「あああああんた、あの娘の知りあいなのか!? た、頼むツ、金はもういい、もういいから、早くあいつを引き取ってくれ！」

「も、もしかしてティナが何かご迷惑を……」

青年の丁重な言葉に、男はモーターでもついているかのような勢いで首を横にブンブン振る。

「めめめめっそもございせん！ こ、この店はちょうど建て直そうと思つていたので、ええ、本当にまったく大助かりですよ。ささ、早くあのおっそろしい嬢ちゃんを連れて帰ってくれ、いや下さいませ〜〜〜ッッッ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

仙獄学園戦姫

ノブナガツ! comic



信長が、秀吉が、義一が、エツチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学園戦姫ノブナガツ!』がここにある!!

待たせたら

毎月中旬
発売!!

18歳未満の方は
購入できません

18

漫画：老眼
原作：斐之嘉和
キャラクター原案：SAIPACO

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中!

編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとられないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

Valkyrie



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!